

# 三人称全知を問う

## 思弁的なナラティブとしての「火を熾す」

小林 正臣

### 1. はじめに——不可視の可視化を試みる

Jack London の代表作の一つである「火を熾す」(To Build a Fire)は、三人称全知(third-person omniscient)の視点によるナラティブである。語り手は、主人公である男ひいては男が連れる犬の内面にも入り込む一方、両者を取り巻く極北の外界から事物を俯瞰することで、まさに第三の人物(third person)として作中に遍在している。しかし、遍在であるゆえに全知であるということはどのように知れるのだろうか。このように前提を問い直すことで、本発表は三人称全知のナラティブに潜む不可視の可視化を試みる。具体的には、タイトルに含まれる火を含めた個別の対象を巨視的かつ微視的——すなわち複眼的——な視点から考察することで、語り手をどのように捉え直し、この人物の全知をどのように推し量ることができるのかに迫っていく。かくして三人称全知を問うことは思弁的に問うことでもあり、そうすることでナラティブが秘める新たな可能性を探る。

### 2. 数字の使用、限界の彼方

物語は冒頭から、舞台となるカナダはクロンダイク地方の雪原がどのような地理的位置にあるかを、マイルを用いて描写する。この数字による客観描写は、自然主義文学としての自然の客観描写だけでなく、ロンドン独自のスタイルも示している。なせなら、それは人間には想像ができないことを示すための数字だからである——“Fifty degrees below zero meant eighty-odd degrees of frost. Such fact impressed him as being cold and uncomfortable, and that was all” (463). ここでの数字の第一義的な意味は、男はみずからの生死にかかわることを想像できないということ伝えることである。しかし、三人称全知の視点から語られる本作においては、生きるか死ぬかという存在論的な重要性以外の意味が、温度に込められている——“[I]t did not lead him to the conjectural field of immortality and man’s place in the universe” (463). ここでの「推論の領域」とは、言い換えれば思弁的な領域でもある。思弁的実在論(speculative realism)の代表的哲学者である Quentin Meillassoux は、人間の思考とモノの存在との相関性——ひいては相関主義(correlationism)——を超越する方法として数学的であることの重要性を説く(3)。人間の特性である言葉の痕跡を残さず、カントの「ものそれ自体」にたどり着くための手段は数字または数式を用いた数学的思考であるという主張には賛否両論がある。いずれにしても「火を熾す」においては、そのように人間の理解を超えたものを思弁的に理解する手段として、人間が生きられる限界以上の温度を提示していることである。そうした温度の彼方、つまり不死や宇宙における人間の位置などについては具体的には全く述べられていない。述べないことで、不可知の領域があるということが示されている。

### 3. Tree Communication、あるいは“Tracherous Tree”

宇宙に象徴される巨視的な視点だけでなく、本作は人間では捉えきれない微視的な視点からも語られる。男が火を熾すことに失敗する場面では、エゾマツに降り積もった雪が火種に落ちる。何週間も風が吹かなかったことから、どの大枝にもかなりの雪が積もっていた。そして男が火を燃やすための小枝を引き抜くたびに、木にわずかな振動が伝わり、それが大惨事を引き起こすには十分な振動となり、大枝に積もった雪が下方の大枝に落ちる。この過程がさらに下方へと繰り返されて木全体にまで広がっていくと、雪崩のように大きくなって、男にとっては何の前兆もなく雪の塊が自身と火の上に落ちてくる(471)。ここで起きているのは、「ドミノ効果」または「バタフライ効果」といわれる巨視的な現象である一方、微視的な視点から考えれば tree communication といわれる現象でもある。小さな枝から大きな枝、そして大きな枝から大きな枝への伝達によって張り巡らされた防御システムが作動した結果、微視的には不可視の伝達行為が、巨視的には可視化されたのである。

男は場所を変えて、最期となる火を熾す作業を行う。上記の木は、男にとって得体の知れないものであり、“treacherous tree”(471)と表現される。すなわち一本の何気ない木は、じつは予期せぬ大惨事を引き起こせる、人間の思考を超えるものでもある。このような木について十全に知りえるのは、物語上は三人称全知の語り手のみである。よって男にとっての“treacherous tree”は、結末に至るまで謎めいた未知の存在であり、三人称全知の視点から書かれた本作における人間とオブジェクトの関係を表象している。つまり、温度であれ、雪であれ、木であれ、どこか得体の知れない、人知を超えた性質を秘めている。そして本作では、これらオブジェクトの存在感が前景化されている。換言すれば、不可視の性質を帯びた個々のオブジェクトが可視化されている。

#### 4. オブジェクトとオブジェクト

本作においては、人間とオブジェクトのあいだに加えて、オブジェクトとオブジェクトのあいだでも互いを十全に知ることはできないのではないかと、思わせる方向にナラティブが展開する。極寒の中、火を熾すことに失敗した男は、手足の感覚を失いつつあるなか、残りのマッチを口にくわえて火を熾して火種をつくろうとするが、そこに雪で冷たくなった苔の塊が火種に落ちてしまう。その塊を必死に取り除こうとするが、男は火を熾すことに失敗する——“The fire-provider had failed” (474)。しかし失敗したのは、火種と小枝どうしでもある。一方の火は燃焼性という性質を、他方の小枝は可燃性という性質を十全には発揮できていない。よって両者が秘めている不可視の性質が、不完全燃焼というかたちで可視化されている。Meillassoux と並ぶ代表的な思弁的実在論の哲学者 Graham Harman は、たとえば火が綿を燃やし尽くすとき、あるいは石が窓を粉々に壊すとき、火や石は対象を燃やして壊してしまわなければ残りえたであろうオブジェクトの性質——“additional secrets” (170)——に永遠にアクセスできないという、オブジェクト指向存在論(object-oriented ontology)を展開する。この立場に従えば、人間はオブジェクトを知り尽くすことができないのと同様に、オブジェクトどうしにおいても対象の性質を汲み尽くすことはできない。その意味で、どのような者や物においても、互いは互いを十全には知りえないのである。

以上の視点から「火を熾す」を読み直してみると、三人称全知の語り手について読者はどれだけ全知であるのかを知りえないだけでなく、オブジェクトどうし互いの性質を十全に発揮しえないのだとすれば、語り手も読者と同等にそれら性質を知りえないのかもしれない、という可能性が浮上する。したがって、「火を熾す」における三人称の語り手は全知と一般的には理解されているが、それはなにをもって全知とするかについては解釈する余地がいまだに残されている。そして、この余地を可視化させる試みにおいて確かなことは、作者は本作において、男にとって存在の彼方を示す温度や、男が誕生する以前ひいては死後にも存在するであろう雪、あるいは男にとって得体の知れない一本の木や、ついには不完全燃焼に終わる火などのオブジェクトを通じて、人間にとってもモノにとっても不可視の世界を可視化させているということである。

#### 5. おわりに——絶対的にわからないものを探求する

三人称全知によるナラティブが提示する不可視の世界を思弁的に探求しつづけていくと、どのようなことが起こりえるのか。この問いに対する一つの答えとして、フランス文学者・思想家の内田樹による他者論が挙げられる——「もし他者が絶対的に『わからないもの』だとしたら、その『わからなさ』は『なぜわからないのか、わからない』、『どのような仕方であらうわからないのかわからない』、『わからないのか、わかるのか、わからない』という一段次数の高いわからなさでなければならないはずである。絶対的に理解を絶したものは、まさにそうであるがゆえに、もしかしたら理解可能かもしれない」(22-23)。絶対的にわからないものは、本来的にはどれだけわからないのかさえわからないものである。それゆえ、いつかはわかるかもしれないとも考えられる。三人称全知のナラティブの究極的な探求とは、このように絶対的な理解不能を思弁的に理解可能にすること、いうなれば Toni Morrison のいう「見えないインク」をどのような形であれ見えるようにすること——“Invisible ink is what lies under, between, outside the lines, hidden until the right reader discovers it”(348)——なのかもしれない。そのように捉え直すと、わからないものや見えないものには、謎めいた未知の可能性を見出すことができる。そして「火を熾す」は、まさにそうした可能性を秘めている。

#### 謝辞

本発表は JSPS 科研費 JP25K03928 の助成を受けたものである。

#### 引用文献

- Harman, Graham. *Guerrilla Metaphysics: Phenomenology and the Carpentry of Things*. Open Court, 2005.
- London, Jack. “To Build a Fire.” *Jack London: Novels and Stories*, edited by Donald Pizer, *The Library of America*, 1982, pp. 462-78.
- Meillassoux, Quentin. *After Finitude: An Essay on the Necessity of Contingency*. Translated by Ray Brassier, Continuum, 2009.
- Morrison, Toni. “Invisible Ink: Reading the Writing and Writing the Reading.” *The Source of Self-Regard: Selected Essays, Speeches, and Meditations*, Vintage International, 2020, pp. 346-50.
- 内田樹. 「はじめに——知性と時間」. 『知に働けば蔵が建つ』, 文春文庫, 2008, pp. 10-26.